

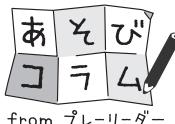
こどもの森の利用案内

- ★ こどもの森は、時間中いつ来ていつ帰ってもOK。お金はかかりません。
- ★ こどもの森にある道具は自由に使えます。使い終わったら片づけてね。
- ★ おやつやお弁当を食べることもできます。ごみは持って帰ってね。
- ★ 汚れてもいい服や靴で来てね。着替えもあるといいよ。
- ★ なくなったら困る大事なものは、おうちにおいてくるか身に着けて遊んでね。



大人のみなさんへ

こどもの森から保護者のみなさんへのお便りです



子どもの遊び場は「まち」にあり！？

久しぶりに、子どもたちが団地の中で遊んでいるのを見た。小学生の頃、友達の住む団地での鬼ごっこに夢中だった時期がある。あの団地の坂や建物、木の配置は絶妙に遊びやすかったように思うのだ。

こんな風に、あの場所で、あの遊び…楽しかったな～という子どもの頃の記憶は、誰でも持っているはず。

子どもが遊びやすい環境って？

子どもの遊び環境の研究分野で有名な東京工業大学名誉教授仙田満先生は、著書『子どもと遊び一環境建築家の眼』(岩波新書)で、「子どもには遊びやすい環境がある」と言っている。子どもが遊ぶためには、環境が大きなポイントになるということだ。

だから僕らプレーリーダーは、こどもの森が子どもに「遊びやすい環境=遊び心を刺激する環境」になるように、様々な工夫をしている。

しかし、それでも公園の中ができる最大限のことをしていくに過ぎない。公園以上に、子どもの遊び心を刺激する環境が、「まち」の中にはたくさんあるはずだ。車の通らないちょっとした路地、憩いの森のような林、高架下の何もない空間、隠れ家的な建物と建物の間などなど。

囲われた場所から「まち」へ！

しかし今、「まち」で、子どもが遊ばなくなった。理由はいくつも考えられるが、一つには、遊び心が刺激されるような環境があったとしても、遊び体験が乏しい子は何をしたら楽しいか発想できないのではないだろうか。遊ぶ力は体験の積み重ねで育つものなのだ。

ここに、こどもの森の存在意義がある。ここには、普通の公園よりも多様な「遊びを作りだせる環境」がある。そしてプレーリーダーがいる。だから、それまで遊んできた体験が少ない子でも、遊びだすことができる。そして遊ぶ経験を積んで、遊び力を育てていける。

遊び力を蓄えた子がそこかしこで自由自在に遊んでいる「まち」。こどもの森は、そんな「まち」の拠点になりたいと思う。

こどもの森は、身近な自然のなか、子どもたちの発想で自由に遊べる緑地です。何をして、どうやって遊ぶか？を、子ども自身が決められるよう、なるべく手や口を出さずに見守ってあげてくださいね。心配なこと、わからないことは、プレーリーダーにどうぞ声をかけてください。



子どもと駆け引き、勝っても負けても

ある日の午後、ある女の子がバケツで水を運ぼうとしていた。その側を通ったとき、「ねえ、これ運んで！」と声をかけられた。

プレーリーダー「え、俺が？なんで？」

女の子「大人でしょ。力あるんだから運んでよ！」

「いやー、それ重いんでしょ。運びたくないよ」

女の子「大人げない！やつてよ！」

というやりとり。さて、どうしたものか。

「これを運んで、何をするの？」

女の子「落とし穴作ってるから、水入れたいのー」

「なるほど！それは面白そうじゃないか」

女の子「じゃあ、手伝ってよ！」

「むむ、でも俺もあっちで基地を作ってるところなんだな」

女の子「えー、今歩いてただけじゃん」

「いやー、白い布があっちに落ちてるからとりに行くところなんだな」

女の子「じゃあ、私が布とってきたら、その間にバケツ運んでくれる？」

「おっ、それならいいよ！やろうぜー！」

その後この子には、何度か手伝いを頼まれた。でも、「○○がしたいから、△△を手伝って！」と、説明するようになった。また、「手伝ってくれたら、代わりに□□やるから」と、条件を出してきたり。さらに、彼女が提示した条件でリーダーがOKしない時は、「どうしたら手伝ってくれる？」と、こちらの意向を尋ねたり、自分のしたいことが、どんなに楽しいか？を、アピールしたり。アピールが上手く、一緒に遊びたくなって手伝ったことも（笑）。

大人は子どもを手伝ってあげるもの、という固定観念がある気がしている。もちろん、子どもが本当に困っているときは助ける。でも、大人にもやりたいことや考えがある。それをすべて飲み込んで、子どもの要求を満たしてあげるのは違うように感じる。意思のある相手をその気にさせるにはどうしたらいいか？を考えて駆け引きするのも、けっこう面白いんじゃないかな。

結局、彼女との交渉の結果、何度も手伝うはめになったが、逆にこちらの遊びに引き込んだのを数回。こうして互いの遊びを出入りして楽しめたのは、互いの「やりたい」を尊重し合えたからなように思うのだ。

from
やーさん

